

想、ヘブライ的ないしキリスト教的思想(信)という両表現を用いているように思われるが、フィロンの古代キリスト教思想に対する影響なり、連続性の問題は、ギリシア教父にとどまらず、今後、著者の成果をふまえ、西方ラテン教父についてもなされる必要があろう。ともあれ、「探求」というパラダイムにより著者が析出した古代キリスト教思想の動詞的性格、神の絶対的能動性(これはユスティノスについても、異なった観点からではあるが注目すべき指摘がなされている、cf. p. 203, 註(2))は、筆者もかつて本書第十章の論文の初出を読み触発されたことがあるが(『中世思想研究』XXV, 拙稿「ギリシアの混合論とクリストロジー」p. 56, 註(54)), 今後大いに留意すべき点であろう。なお本書には、《Vetus Latina》の自在の活用がみられる。これは、教父研究をなす場合、当然のこととはいえ、わが国のこの方面の研究でこうした手順がふまれている例を筆者は寡聞にして知らない。著者のこの態度は、同学の一人として学ぶところが多大である。

Gerard Verbeke: *The Presence of Stoicism
in Medieval Thought.*

The Catholic University of America Press,
Washington, D. C. 1983,
pp. viii+101.

金 井 多津子

本書は、中世におけるストア思想の受容とその存続を、中世全体を見通す広い視野をもって論じたものである。その出発点となっているのは、著者が本書冒頭でふれているように、M. Spanneut の *Permanence du Stoïcisme de Zénon à Malraux* (1973) にみられるような、ストア思想は中世においてほとんど顧られなかったとする立場に対する批判である。そして著者は、ストア思想と中世の思想家たちとのかわりを端的に表すものとして、マテリアリズム、自然法、synderesis、自由、

運命といった問題を取り上げ、従来の個別的研究を援用しつつ論を展開している。本書の構成は以下の通りであるが、各章ごとに100余りの註が付され、当該の問題それぞれの中世における展開ならびに研究史を概観するのにも、本書は役立つと思われる—I. Medieval Acquaintance with Stoicism, II. The Challenge of Materialism, III. Ethical Perspectives, IV. Fatalism and Freedom.

著者によれば、ストア思想の中世への流入の特徴の一つは、後にふれるような様々な経路によって伝えられたという点である。ストアの思想自体が一貫したものではないうえ、それが中世以前から徐々に、間接的かつ断片的に伝承されてきたために、中世の思想家たちは、ストア思想をそれと意識することなく影響を受け、自らの思想のうちに取り入れていた、と著者は述べ、中世におけるストア思想の受容の状況は、12世紀にアラビア語等からラテン語に訳され、一挙にもたらされたアリストテレス哲学の場合と著しい対照をなす、とみている。アリストテレス哲学の場合、キリスト教の教義との矛盾、それに対する賛否の論争がなされたために、その著作の翻訳と受容の過程はかなり明らかにされており、中世のある時期にどの著作が読まれたかということも推定することができる。これに対し、ストア思想の場合、著者によれば、その受容の経過から、一つの体系として批判の対象とされることはなかった。したがって、中世におけるストア思想の影響を研究するにあたって、アリストテレス哲学の中世への影響に対するのと同様の方法は有効ではありえない。そこで著者は、古代から継承され、先に示したように次第に西欧思想のうち組み入れられていったいくつかの典型的なストアの概念を取り出し、それらに対する反発と同化とを検証することによって、中世におけるストア思想の presence を明らかにしようとしているのである。

ストアの思想家のうち、中世においてその著作が直接読まれていたのはセネカである。セネカは、使徒パウロと出会ったことがあるという伝承 (Hieronymus, *de viris illustribus*, cap. 12, PL, XXIII, 603) とも相まって、中世の思想家の多くから卓越した賢人とみなされ、中世初期にはすでに、《Florilegium Gallium》、《Proverbia Senecae》等の詞華集が編まれていた (p. 14)。著者は、特に12世紀から14世紀に至る時代において、セネカへの言及のみられる思想家を網羅的に列挙している。さらに、中世の思想家たちにストア思想をもたらした著作家として、ケケ

ロ、ギリシアならびにラテン教父、カルキディウス（『ティマイオス註解』）、13世紀に翻訳されたアリストテレスの註釈家たち（たとえばアフロディシアスのアレクサンドロスの『運命論』、シンプリキオスの『カテゴリアエ註解』）等が挙げられ、これに加えてアラビアの哲学者にも言及がなされており、著者の視野の広さがうかがわれる。なお、シンプリキオスにはエピクテートの『エンケイリディオン』に対する註解があるが、本書では言及されていない。この点は、エピクテートの同書が15世紀以前にはラテン訳されていなかった事実と考え合わせると興味深いものがある。

第1章において、以上のような本書におけるアプローチの骨子が提示され、第2章以降個々の問題が検討されていくが、まず第2章において取り上げられるのはマテリアリズムである。

著者によれば、ストアのマテリアリズムは、すでにテルトゥリアヌス、ラクタンティウス等の初期キリスト教教父の思想のうちに導入されていた。その受容の契機として著者は、初期教父にみられる、魂を神的実在の火花とし、低次の力に由来する現世からの逃避を説くグノーシス派に対する反論と、神のみが非物的なものであると強調することによって神と被造物との相違を明確にしようとする試みの二点を挙げている。そして著者は、西方においてマテリアリズムの観点が影響力をもっていたのは7世紀までだとする M. Spanneut に対し、特に後者の点から、9世紀から12世紀に至るまで、マテリアリズムはキリスト教思想家たちに受け入れられていたとして反論する。さらに、マテリアリズムに関連して注目されるのは、靈魂伝遺説の問題である。著者は、テルトゥリアヌスによって原罪の継承の論拠として展開された靈魂伝遺説は、ストアの見解と符合しており、ストアによって触発されたものであると主張し、その上、後代のパウルス・アルヴァルス (c. 800—c. 860) やカンブレのオド (1113没) 等の名を挙げ、それが中世において広く受け入れられたことを指摘している。これは興味をひく論点ではあるが、本書では、ストアのどの思想家のいかなる見解が靈魂伝遺説に影響を及ぼしたのか具体的に示されておらず、著者の主張の根拠が明確にされていない。さらに13世紀になると、魂に関するマテリアリズムの見解は、トマス・アクィナスをはじめ、多くの人々の批判的になってくるが、著者は、批判の対象とされていること自体、それがストアの思想と認

められてはいないにせよ、マテリアリズムが13世紀にも存続していたことを示唆しているととらえる。著者の観点からすれば、ストアのマテリアリズムは、キリスト教思想家たちにとって、常に同化もしくは批判いづれかの対象として、中世後期に至るまで存続していたことになるのである。

次いで、第3章において、中世のキリスト教思想に対するストアの倫理思想の影響が論じられるが、著者は、特に自然法、*synderesis*, *syneidesis* (*conscientia*) の問題に着目する。周知のように、*synderesis* に関しては、それを主意的・主知的いづれかの方向で理解するかの論争が13世紀になされてくるが、その発端となったのは、ヒエロニムスの『エゼキエル書註解』(I, c. 1) にみられる *synderesis* に対する *scintilla rationis* というペトルス・ロンバルドゥスの規定である(『命題集』II, dist. 39)。この論争の背景には、人間は原罪を継承しているにもかかわらず、いかにして道徳的完全性への傾向を持ち続けるか、というキリスト教倫理思想における根本的問題が存在していた。著者は、キリスト教思想家たちが、この問題の解決にあたって、*synderesis* をストアの *oikeiosis* 概念との関連においてとらえたことを指摘し、そこに、彼らによるストア思想の受容とその展開の一例をみようとする。しかし、本書では、*oikeiosis* が中世においてどのようにとらえられ、いかにして *synderesis* と関連づけられていったかに関し、具体的言及はなされていない。

人間の道徳的行為に対する働きの点で、この *synderesis* との区別が問題とされるのが *conscientia* である。著者は、ストアにおける *conscientia* を、基本的にセネカにみられるような自己の行為に対するいわば「裁判官」としてとらえている。著者によれば、中世において、*conscientia* 概念は、こうした基本的意味を保持してはいるものの、必ずしも明確に定義されていたわけではなく、時には自然法、*synderesis*、あるいは自由意志とすら同一視されることもあった。だが、13世紀になると、アルベルトゥス・マグヌスをはじめとする、*synderesis*, *conscientia*, 自然法に関するストア的発想とアリストテレスの実践的三段論法とを結びつけ、人間の行為に対する働きの点で *synderesis* と *conscientia* とを区別しようとする試みがなされてくる。この場合、大前提は *synderesis* によって与えられるが、それは個々の人間に内在する自然法の認識に由来する。他方、*conscientia* は、普遍的な道徳的直観を個々の状況に適用する理性の働きとされ、結論はこれによって引き出

される。conscientia に関するこうした考え方はトマス・アクィナスによってさらに発展させられ、自然法、synderesis、conscientia の三者はいっそう明確に区別されつつ、関連づけられることになってくるのである。

以上のように、著者は、自然法、synderesis、conscientia というストアに由来する三つの概念が、中世の倫理思想の基本的要素として多大の影響を及ぼした、と結論する。だが、これらの概念は、決してオリジナルな形で受容されたわけではない。たとえば自然法の場合、キリスト教と抵触する汎神論的側面は排除され、「自己の欲することを他人になし、自己の欲しないことは他人にしてはならない」という、聖書に由来する原則が自然法の根本原理とされてくることが示すように、ストアとは異なる意味が加えられるのであるが、著者は、こうした変容が生じたことも認めながら、なお、その基調としてのストア思想の存続を主張するのである。

最後に第4章において論じられるのは、運命論である。著者は、ストアの運命論の特色を、世界に内在しそれを支配する神的理性、もしくは神の摂理と運命とを同一視した点に求め、これを the rationalization of fate と呼んでいる。そして著者によれば、これが契機となって、運命と人間の自由をいかに調停するかに関し、ネオプラトニズム的な存在の階層化を背景として運命と摂理とを区別し、運命を摂理に従属させるという傾向がみられるようになる。特に中世とのかかわりでは、この過程を背景とするポエティウスの観点、つまり、神と人間との認識の在り方の根本的相違を主張することにより、摂理を praevidentia とみることを否定する観点(『哲学の慰め』V, 4)は、アルベルトゥス・マグヌスやストラスブールのウルリッヒ等に影響を及ぼすことになる。そして著者は、こうした運命論の展開の発端となったという意味において、ストアの運命論は中世を通じて存続していたと主張するのである。なお、同章では(p. 74)、キケロの *De fato* において(XVII, 39)、運命を必然的さだめとみなす観点に立つ者としてアフロディシアスのアレクサンドロス(後3世紀)の名が言及されていると述べられているが、これは時代的にみて矛盾しており、実際当該箇所に見られるのはアリストテレスの名であって、著者の思い違いである。

以上のように、本書において、著者は、ストアの思想内容がキリスト教のコンテクストの中で大きく変容したことは認めつつも、なお、ストアに由来する諸発想

は、基本的枠組として中世を通じて存続し、この意味において中世における the presence of Stoicism を主張している。だが、こうした著者の見解に対し、たとえば中世の運命論に関し、たしかにその発端はストアの運命論であったにせよ、そこに実際に影響を及ぼしたのはネオプラトニズムやキリスト教の解釈を経て展開されたものであって、ストアの運命論そのものの存続は認められないという批判ができないわけではない。筆者のみる限り、G. M. Ross がこうした見地から書評している (*The Classical Review*, vol. 34, No. 2, 1984 所収)。

金子晴勇著『アウグスティヌスの人間学』

昭和57年，創文社，vii+431+18 頁

片 柳 栄 一

著者は先に『ルターの人間学』を著わし、日本のルター研究に大いなる刺激をもたらしたのであるが、著者がルターと並んで長年取り組んで来たアウグスティヌスに関する研究を集大成したものが本書である。著者は自らの人間学的方法について序論の最後のところで次のように述べている。「一般に思想は基礎経験のロゴス化において形成されるが、人間学的方法はこのロゴス化が生じる第一次の過程を解明するもので、たいていの場合、人間に最も身近な心身に即して思想が自覚的に形成されはじめ、やがて第二次のロゴス化において世界観としての形勢が整うようになる。したがって人間学的——人間論的といっても同じある——研究は基礎経験が思想へと固定化する以前の思想の形成過程からその実存的意義を解明することを目的としているのである。私はこの方法によって思想の形成過程を学ぶことにより思想の特質を的確に把握しうるのみならず、思想を私たちにきわめて身近なものとして